

式 辞

静岡県立大学、大学院、そして短期大学部に入学された 945 人のみなさん、入学おめでとうございます。全教職員を代表して、諸君の入学を心よりお祝い申し上げます。

ご家族の皆様には、ご子弟の入学をお祝い申し上げるとともに、ここまでお育て下さったことに対して、労いの言葉を差しあげたく思います。

本日は、静岡県知事川勝平太様はじめ、多くのご来賓に臨席いただいております。年度始めのお忙しい折にご来臨いただきましたこと、厚く御礼申し上げます。

本学は 1987 年に、静岡薬科大学、静岡女子大学、静岡女子短期大学の三校を統合して設立されました。今年で、開学 32 周年を迎えました。源流となった、大正 6 年開学の静岡女子薬学校から数えると、102 年の伝統を持つ高等教育機関です。静岡県立大学は、これからどのように変わろうとしているのでしょうか。今日から、知の共同体であり、知の拠点である本学の一員として加わった皆さんに、私たちが目指していることをお伝えしようと思います。

今、日本では少子高齢化が進み、人口減少が続いています。その結果、地方消滅が起きることが懸念されています。しかし未来を悲観しているばかりではなりません。フランスの哲学者アランは「悲観は気分属し、楽観は意志に属す」と言っています。むしろ人口減少の時代こそ、チャレンジの時代であり、新しい時代への変化の兆しが動き出した時代だという発想の転換が必要です。ひとつの歴史的な例をあげましょう。

ほとんどの方は田沼意次の名前を知っていることでしょう。今年、生誕 300 周年を迎える田沼意次は江戸時代 9 代将軍家重、10 代将軍家治に仕えました。あれよ、あれよと言う間に出世して、大名にとり立てられます。その城は遠州相良、現在の牧之原市に築かれました。権勢を誇った「田沼時代」は 1767 年から 86 年にかけて足掛け 20 年続きました。ところが将軍家治が死去すると、手のひらを返すように、老中を辞任させられ、降格、減封、そして財産も没収されてしまいます。相良城も打ち壊されてしまいました。

時あたかも天明飢饉に見舞われた時代です。18 世紀初頭に始まった人口減少が一段と進んだ時代でもあります。田沼といえば賄賂政治を思い起こすという理由で、日本史上の三大悪人の一人に数えられた時代が長く続きました。しかし今では評価が変わってきています。人口減少が深刻だった 18 世紀半ばは、農村で工業化が進んだ時代でした。田沼は、こうした変化を押さえ込むのではなく、

変化へ適応するように貨幣制度を改革し、市場経済や商工業に目をつけた革新的な財政政策を実行したのです。また蘭学を保護しました。杉田玄白、前野良沢がオランダの医学書から翻訳した『解体新書』が出版されたのが、1774 年、田沼時代の真っ只中でした。エレキテルで知られる平賀源内も田沼時代を代表する人物でした。観察と経験に基づいた医学、科学がようやく広がりだしたのが田沼時代なのです。また 18 世紀末期の四半世紀は、諸藩が学問を奨励し、幕末・明治初期について、多数の藩校が開設された時代でもありました。こうしてみると田沼時代は、明治維新に先駆けて、徳川社会の中から近代化が始まった時代、「徳川近代」への出発点になった時代と言えないでしょうか。

2015 年に、伊豆韮山の製鉄用反射炉も含まれる「明治日本の産業革命遺産」(23 遺産) が世界遺産に登録されました。これらの多くが着手されたのは、明治ではなく、1850 年代以降の幕末期でした。製鉄、造船、大砲製造、石炭採掘などの欧米の近代技術を、幕府や諸藩が競って導入しようとしたのです。アヘン戦争をきっかけに一気に高まった近代技術導入競争の背景には、田沼時代に培われた経験主義的な科学の土壌があったと考えないわけにはいきません。

静岡県立大学が目指していることについてお話しします。本学は「地域社会と協働する、広く社会に開かれた大学」を理念の一つとしてうたっています。そして「県政や産業界との連携を図りながら、卓越した教育と高い学術性を備えた研究による成果を還元」することを目標の一つとしています。私はこれを「地域をつくる、未来をつくる」という言葉に置き換えて、モットーとしました。

静岡県は、昨年、総合計画として「新ビジョン」、「富国有徳の美しい“ふじのくに” の人づくり・富づくり」を発表しました。地域を豊かにするとともに、有徳、すなわち徳を備えた人材を育てようということです。品性を身につけること、善や正義に従う行動をすることを、私は本学の教育の重要な目標にしたいと思います。今こそ、静岡県立大学は地域の大学として、地域の核となって、地域を豊かにするアイデアを提供し、次代を担う若者を育てていかなければならない責任を負っていると考えています。

本学は平成 26 年度から文部科学省の補助金による「地(知)の拠点事業」、いわゆる COC (Center of Community) 事業として『ふじのくに「からだ・こころ・地域」の健康を担う人材育成拠点』に取り組んできました。豊かな健康長寿社会の実現の担い手を育てることが主眼です。全学共通科目に地元静岡を学ぶことを目的に、20 科目以上の「しずおか学」や地域づくりに関する科目を開講しているのも、地域の未来を担う人材を育成するという、本学のミッションの実践にほかなりません。

このプログラムでは、「地域のために、地域とともに」をスローガンに、実践

的なコミュニティ・ワーク力を身につけてもらうことを目指しました。コミュニティ・ワーク力とは、地域が抱えている課題を解決するために、世代、分野、職種を超えて「チーム活動」を牽引する能力を言います。昨年3月に、初めて、コミュニティ・ワーク力を身につけたと認定された学生に対して「コミュニティ・フェロー」の称号を授与することができました。これまでに300人以上の学生が認定されています。5年間のCOCの事業期間は3月で終了しましたが、今年度からは自前で継続していきます。

この春、大学にとって嬉しいニュースが舞い込みました。Times Higher Education という組織が、世界の大学ランキングを調査しています。この機関が、3月27日に日本版ランキングを発表しました。この調査に参加した大学は330校だそうですが、わが静岡県立大学は、第71位でした。昨年は88位でしたから、大きくランクを上げたといえます。

このようなランキングに一喜一憂する必要はないし、それを上げることを自体を目的にするのは間違っているでしょう。しかしこの評価を通じて、何が本学の強みであるか、あるいは何が弱いのかを知ることができます。県立大学の場合、学生に対する教育充実度と、教員数や研究活動を含む教育リソースの評価が高い反面、国際性と社会的な認知度で劣っていることが明らかになりました。留学生の受け入れや送り出し、外国人教員比率、県外での知名度が低いのです。

もちろん私たちも国際交流を無視してきたわけではありません。グローバルに活躍できる人材を輩出すること、受け入れることが、地域を強くするものだと考えています。これまでも大学間交流、学部間交流、語学研修の形で、国外35大学と交流をしています。しかし十分な成果を上げるまでには至っていませんでした。そこでこの4月から、国際交流センターを設け、国際交流の一層の充実をスタートしました。

また文部科学省の補助金を得て昨年度からはじまった、「大学の世界展開力強化事業」がいよいよ今年から本格化します。これは、上智大学、お茶の水女子大学と組んで、国公私立の3大学が役割を分担しながら、アメリカの10大学とインターネットを活用した教育プログラムを実践しようという試みです。

今、本学には寄宿舍がありません。そこで、外国からの学生や研究者を受け入れ、地域の人々との交流の拠点となる交流会館を作る計画を立てました。是非皆さんの希望や夢を寄せてください。海外との交流は、自分自身と、地域を見直すきっかけになることでしょう。

世界は「インダストリー 4.0」とか「ソサエティー 5.0」と呼ばれる時代へと転換しようとしています。社会の変化にあわせて、教育も大きく変わりつつあり

ます。本学でも、これまで各学部でカリキュラムの改定を行ってきましたが、今年度は、経営情報学部観光マネジメントの領域を開設しました。国際関係学部ではグローバルな相互理解、多様な価値観を尊重しつつ平和で発展的な社会の構築に貢献できる人材育成を目指す、新カリキュラムが始まりました。

みなさんはそれぞれに夢や計画を持って入学されたことと思います。静岡県立大学に入学されたことに誇りと自信をもって勉学に励み、夢の実現に向けて努力してください。しかし知識や技術を習得することだけが学習ではない。どうすれば新しい知識や技術を生み出すことができるか、主体的に学ぶことが求められています。また、みなさんが選んだ学部学科で専門的な分野の勉強に努めてください。その上で他の学部学科で学ぶ学生、教職員あるいは地域の方々との交流に努めてください。社会の課題を解決するためには、一人一人が高い専門性と、幅広い教養の裾野を兼ね備えるとともに、チーム・ワーク力が求められます。誇りと自信をもって「地域をつくる、未来をつくる」主人公として、大いに研鑽を積んでいただきたい。健闘をお祈りします。

静岡県立大学
静岡県立大学短期大学部
学長 鬼頭 宏